

坂口ふみ 『〈個〉の誕生』

岩波書店, 1996, 302頁, 7500円

大田 俊寛

近年ある女性の研究者によって書かれた『〈個〉の誕生』という一冊の書物が小さな波紋を広げつつあるということは、人づてに聞いて知っていた。しかし私は、その（お世辞にも取り立てて人の目を引くとはいえない）書物の表題を耳にして、その内容を、「いわゆる『近代的個人主義』や『近代的自我』の発生の経緯と、それに対するポスト・モダニズム的観点からの批判」といった、幾分ステロタイプに陥りがちな構図を勝手に推測してしまい、あえて手に取ってみようともしなかったのだった。

その私がこの書物と本当に出会うことになった場所は、大学の図書館での「キリスト教」関連の図書の本棚であった。上に述べたような内容を推測していた私は、その本棚で『〈個〉の誕生』を目にし、「なぜこの本がこの棚に収められているのだろう」といった疑問から、それを手に取った。そして『〈個〉の誕生』をいう主題の下に「キリスト教教理をつくった人びと」という副題が添えられているのを見たとき、意表を突かれたと感じると同時に、その内容に対する好奇心が膨らんでいくのを感じたのだった。

『〈個〉の誕生』の大きなテーマは、四つのキリスト教公会議と、その周辺で行われたさまざまな論争の分析を通して、キリスト教のもっとも根本的な教理（三位一体論とキリスト論、及びその双方の接続）の生成の過程を明らかにすることである。著者はそこで生成されていく概念を、潜在的にはありながらも、常に西欧を根底で支えているものとして捉えている。

先に述べたように、通常「西欧での〈個〉の誕生」というテーマを耳にすると、デカルトの「我思う、故に我あり」といった命題によって定式化された、「近代的自我」の誕生を想像するのが普通だろう。しかしこの書物はむしろ、「それが西欧の支配的概念である」とする考えに対する批判、もしくはその相対化を目指して著されている。著者はその、「いわゆる近代的自我」の概念を、アウグスチヌスによる「心重視」「内面重視」型の神学に始まり、そこからデカルト、カントに代表されるドイツ観念論へと流れていく系譜として考えている。しかしその系譜は、西欧をギリシャの古典古代文化に始まるものとして捉える場合には、むしろ地理的かつ歴史的に、傍流のものと言え言える。著者がこの書物で描こうとしている「〈個〉の誕生」とは、すでに紀元前5世紀には「制度と、学問と、美と、倫理との、ある有機的結合をそなえた古典古代文化複合体」を形成していたギリシャと、原始キリスト教の教えが核となって引き起こされた「ビザンツ的インパクト」の双方が、どのように接触し、互いを排除したり吸収したりしながら融合していったかという過程であり、それをまさに「繊細なる精神」によるものと言える筆致で、丁寧に描き出そうとしたものなのである。

ただ、本書の構成についての紹介を始める前に、評者の立場について若干の弁解をさせていただきたい。まず第一に、評者の専門は、きわめて近い隣接領域ではあるものの、この分野そのものというわけでは決してなく、初期キリスト教教理史に関するこれだけ詳細な書物を読むのは初めての経験であった。ゆえに、この分野に関する他の専門書と比較してこの書物を評価することについては、残念ながら自分の能力不足を認めざるを得ない。しかし、初期キリスト教教理史について日本語で書かれた、または日本語に訳された書物がそれほど多くない中で、これほど同時代的（あるいは普遍的？）な問題意識から著述された書物が他に類を見ないものであるということは、間違いないであろう。

以上の理由によって、この書評は、この書物の「客観的評価」とはほど遠く、むしろ一素人の「感想文」と考えていただいた方が、むしろ実状に近い。評者としては、「勉強になりました」という感謝の念をもって最後のページを閉じたいところではあったが、この書物の持つ魅力に負け、駄弁を弄することになる。

* * *

この書物の冒頭、「序章 カテゴリー」は、著者の友人である、女性の東洋学者への追想によって始まる。その筆運びは、きわめて文学的なものである。このエピソードによって著者が語ろうとしているのは、一言で言えば「隣人愛」ということなのだろうが、そこにはいくつかの（必ずしも通時的ではない）段階が考えられているように思われる。著者の言葉を借りて整理してみるなら、それは、「カテゴリー」の「存在」とその「切断」、そしてそれらの「逆説的融和（＝隣人愛）」である。

著者の友人であるアンナは、さまざまな文化的「カテゴリー」を強く意識し、必然的にそれと戦いつつ生きた人物であったようである。彼女は、日本で暮らす「ガイジン」であり、男性中心のアカデミズムの世界で生きる「女性」の研究者だった。ただ、さまざまな文化的「カテゴリー」と戦いながら生きていたのはアンナだけではなく、おそらく著者もまたそうであろうということは、次のような文章の行間からうかがい知れる。「一般に、差別する側はほとんどつねにその差別に関して無意識である。しかし差別される側にとっては、その無意識こそ、こちらでは強烈に意識せざるをえない壁であり、胸もとにつきつけられた刃であり、恐ろしいリアリティーである。ここには完璧に非対称な構造がある。あらゆる差別についてこのことはあてはまるであろう。」著者とアンナを友人として結び付けていた一つの要因として、このようなリアリティーに基づいたある共感が、存在していたのではないだろうか。

そして次に、そういったさまざまな文化的「カテゴリー」を「根こそぎ否定しようといういくつかの試み」の一つとして、イエスの思想と行いについて手短かに語られる。この箇所は、分量的に多くは割かれていないものの、この書物の大きな核の一つである。著者はイエスの思想を「温かな否定」、「人間のための否定」として特徴づけている。次の第一章から始まるこの書物の本文は、初期キリスト教教理の生成に関する詳細な議論に踏み込んでいくことになるのだが、それらはいわば、「隣人愛」としての「大きな回り道」だとさえ言える。その過程で、「自らの隣り人を直視せよ」というイエスの教えは、ギリシャのさまざまな思想体系と接触し、その普遍的・抽

象的システムの内部に吸収されていく。しかし、その消化過程の中で常に完全には消化されない永遠の異物として存在するのが、イエスの具体的な「個としての存在の概念」であるということになる。

それらの過程を「大きな回り道」として捉えるものの、著者はそれを、文化のよけいな贅肉として切り捨てようとするわけではない。確かに、イエスの「個」の思想を概念化しようとするのは、「本来静的でないものを静的に固定すること」である。しかし著者は、その捉えられないものを概念化しようとする努力を、肯定的に評価している。「それをはじめから捉えられないものとしてあきらめるより」、「その概念がどんなにすみやかに空洞化しても、その内実をふたたび他のことば、他の概念機構で表現しようというやむことのない努力」に対して、プラスの評価を与えているのである。そしてこれはまた、「〈個〉の思想」の概念化を巡る論争が、なぜこれほどまでに長く精緻なものになったかということに関する、非常に簡潔な説明をも与えていると考えることができるだろう。

* * *

第一章から第五章までの本文では、前にも述べたように、キリスト教の根本教理である三位一体論とキリスト論を巡る論争について叙述されている。それぞれの章は、大枠は歴史の時間軸に沿って、さまざまな論争の内容とその結論、また、その結論が次なる論争に対して与えた影響や、それを必然的に引き起こさざるを得なかった因果関係が説明される。何しろ問題が「矛盾する要素の統一」に関わるものであるだけに、それらを強引に要約してしまうことは、危険でさえあるだろう。そこでここでは、特に評者の興味を引いた部分に焦点を絞つつ、それぞれの章を概観してみたいと思う。

第一章「いくつかの日付」では、紀元四世紀から六世紀までの四つの公会議の日付が挙げられ、「教義論争の意味」についての大まかな考えが示されるとともに、コンスタンチヌス帝の「ミラノ勅令」によるキリスト教の公認、そして初めてのキリスト教公会議である「ニカイア公会議」という、キリスト教がその輪郭を形成し始める発端である、二つの事件について説明される。

この二つの事件には、さまざまな周囲の状況が関与していた。その一つは、ローマ帝国の安定を意図したコンスタンチヌス帝による政治的な干渉であり、その他には、アリウス派に代表されるさまざまな異端との教義的論争である。そしてニカイアの公会議では、「イエス・キリストはその父と実体を一にするホモウシオスである」という正統教理が確定されることになった。

この教理は、「実体（ウシア）」という語の多義性や、それがアリウス主義を否定するために用いられたこと、また、その結論が皇帝の意志によって押し切られたことなど、さまざまな問題を孕むものであり、最終的な決定をもたらすものではなかった。そしてそれゆえに、この決定は、次なる議論の呼び水ともなることになる。しかし、ここで著者が描こうとしているのは、その論争と教義の確定を政治的な意図に還元するといったことではなくて、むしろその背景に存在する、文化相互のぶつかり合いである。

著者の主張によると、ギリシャの思弁的・形而上学的関心は、パルメニデスの思想に典型的に現れている。パルメニデスは、ミレトスの自然学派が「水」や「空気」などのさまざまな「万物

の根源（アルケー）」を探求した後、それらを「一」としての「存在」という、極度に抽象的な概念によって総括した。ギリシャの思想は、自然学や神学（ヘシオドスの『神統記』）などのさまざまな領域において、現実世界の多様性を「一なるもの」に還元しようという道のりを歩んでいた。そしてパルメニデスは、いわば、その傾向を極端なまでに押し進めた思想家であったということになるだろう。そして、これに対するキリスト教思想は、「パルメニデスに背くもの」、「ペルソナ＝個としての個」に基盤を置く思想として、そこに再び多様性を組み込むことを企図することになるのである。

第二章「ヒュポスタシスとペルソナ」では、ニカイア公会議の「多でありながら同時に同本質（ホモウシオス）である」という決定を反映して導き出されてきた「ヒュポスタシス」というギリシャの概念と、その（奇妙な）ラテン語訳である「ペルソナ」という概念の関係を中心として、カルケドン公会議以前の教理論争について語られている。

「ヒュポスタシス」というギリシャ語の概念を、著者は「迷子になった概念」と言う。ギリシャのさまざまな抽象概念は、そのままの語形をとどめたり、あるいはその他のヨーロッパ語に翻訳されたりして、近代語の中に吸収されていった。しかし「ヒュポスタシス」は、それがキリスト教教理にとって「父・子・聖霊」というそれぞれの要素の個別性を表す重要な概念であったにもかかわらず、「ペルソナ」という別の語義を持ったラテン語の訳語が与えられることによって、いわば「迷子」になってしまったのである。「ヒュポスタシス」は、時の持続、存在を得ること、起源、基礎、主題、目的、財産などの意味を持つ多義語であるが、この語が持つ基本的なイメージは、「流動的な液体が固体化したもの」「流動のうちのいつかの留まり」といったものであるという。ギリシャの教父たちはこの概念を用いて、三位一体を「一つの実体（ウーシア）と三つの位格（ヒュポスタシス）」だと表現した。

しかし、このギリシャの定式に対して西方ラテン世界が最終的に対応させたのは、「一つの実体（エッセンチア）と三つの位格（ペルソナ）」であった。「ペルソナ」はラテン語で「仮面」を意味する言葉であり、ギリシャ語の「ヒュポスタシス」と対応するものではない。語義から考えると、ギリシャ語の「ヒュポスタシス」にはラテン語の「スプスタンチア」が、ラテン語の「ペルソナ」にはギリシャ語の「プロソーポン」が対応するのが正確なはずである。「ヒュポスタシス」が「ペルソナ」に対応させられたのは、ギリシャの定式が成立する以前に西方においてすでにテルトゥリアヌスが「一つのエッセンチアと三つのペルソナ」という区別を確立していたこと、ラテン語においてエッセンチアとスプスタンチアは明確に同一のものとされており、「一つのエッセンチアと三つのスプスタンチア」という言い方が極めて困難だったこと、異端のネストリウス派が「プロソーポン」を重要な概念として使用していたことなど、さまざまな原因が考えられる。しかし、論争の歴史的経過の後に残ったのは、「ヒュポスタシス＝ペルソナ」という「<個>の誕生」を意味する定式であった。

「ヒュポスタシス＝ペルソナ」という、矛盾を孕んだ「カテゴリー」の成立。著者はこの事態を、次のように肯定的に評価している。「ヒュポスタシスは自然学的・形而上学的な存在論のことばであり、ペルソナは劇場と法律と日常生活のことばである。この両者が等置されて、一つの同じ対象を指すとされるとき、その対象には、複雑な交響が生じ、多様な倍音が生じる。キリスト教思想の中核となったペルソナ＝ヒュポスタシスは、このようにして極めて豊かな概念となった。」

著者にとってこの概念は、現在もヨーロッパの思想に内在している「種子」である。それはしばしば、「折衷的」な概念であるとして軽蔑的な評価を受ける。しかしそれは、ローマ帝国という多民族・多文化の集合体を背景として、ギリシャ語圏の文化とラテン語圏の文化、そしてそれらにイエスの精神を反映した「ビザンツ的インパクト」が加えられて生じた、さまざまな文化の出会いが生み出した「種子」なのである。

第三章「カルケドン公会議」では、カルケドン公会議における決定と、その前後の論争が細かく扱われる。ニカイアの公会議による決定はもちろん、全ての論争に結論を与えたのではない。むしろニカイア以後、議論は細分化し、さらに多くの概念についての論争が巻き起こった。評者はそれらの議論の一つ一つを正確に理解している自信はないし、またそのスペースもないため、詳しくは本文を読んでいただくとして、ここでは「神の母(テオトコス)」を巡る議論を例に取ってみたい。

ネストリウスは、マリアが「神の母(テオトコス)」と呼ばれることに対して鋭く反対した。大方の教父たちは、これが「イエスは神である」という説からの正しい論理的帰結であり、広く民衆の支持も得ていたことから、この呼び名を肯定していた。しかしネストリウスは、それがイエスの人性の完全さを損なうものとして反対したのだった。ネストリウスの考えは、キュリロスらによって異端とされた。その反映として、カルケドン公会議による信条には、「マリアがテオトコスであることを否定するものは異端である」といったアナテマ(異端排斥)が加えられることになる。カルケドンの信条はこのように、ニカイア信条とコンスタンチノポリス信条の正統性を確認すると共に、さまざまな「新しい異端説」に対するアナテマを付加することになったのである。

第四章「キリスト教的な存在概念の成熟」では、ネオ・カルケドニズム、キリストにおける神性と人性の結合の仕方に関するさまざまな理論、エルサレムのレオンチウス、ビザンツのレオンチウスの学説などについて、補足的な説明がなされるが、その概観はここでは省略することにする。

第五章「個の概念・個の思想」は、本書の結論部である。そこにおいて著者がもう一度振り返ろうとするのは、もちろんあの「ビザンツ的インパクト」についてである。「ビザンツ的インパクト」という言葉はこの書評でも何度か使ってきたが、これによって著者が表現しようとしているのは、「律法の遵守ではなく律法の「完成」をめざし、弟子たちが安息日に麦を摘むことを弁護し、複雑きわまりないユダヤの律法を「神の愛と隣人の愛」に帰すると言いきった、あの精神」のことであり、それをあえて「ビザンツ的インパクト」と呼ぶのは、「イエスの愛の思想が本質的に含みもっていた既成の道德・規範・文化の絶対視への対抗と批判が、私がここで扱ってきた時代には、より抽象的で理論的な次元のものとなり、これがその後のヨーロッパの思想生命の根幹をなす形・図式を示していると思われるから」であった。「ヒュポスタシス=ペルソナ」の概念の結合を中心として表現された「ビザンツ的インパクト」は、これまで述べてきたように非常に繊細な概念である。そしてそれゆえに、その概念は、さまざまな硬化のメカニズムにしばしば取り込まれ、見失われてきた。しかし、この「語りがたい根拠」に対して与えられた「名づけ」は、それにもかかわらず「自分のもたらした硬化を自分のうちから破る原動力をも提供して来た」のではないかと、というのが、著者がこの書物で提起している、西欧の「個の概念」をめぐる大きな思想的仮説だということになる。

* * *

最後の数ページである「おわりに」では、再び友人のアンナへの追想が語られている。最初に私は、友人とのエピソードによって著者が語ろうとしているのは「隣人愛」についてであろう、ということを書いた。そして、この書物が、その「隣人愛」を出発点として再びそこに回帰している、と要約することは、それほど誤りではないだろう。

最後に評者の非常に個人的な見解を述べさせていただくとすれば、私は「隣人愛」という言葉があまり好きではない。というのは、「愛」という言葉があまりにポジティブに強く響きすぎて、人間同士の関わり合いの中に含まれる痛みや苦しみが、そこから抜け落ちてしまうように感じるからかもしれない。しかし、ここに描かれている死に近いアンナと著者との関わり合いは、「隣り人を直視する」ということが「いつも両刃の剣」であり、「いきいきと真実」であると同時に「生命を抑え、殺す傾向をつねにもっている」ということを、微妙に表現することに成功していると言えるだろう。

著者は、この書物で語られた全てのことを、アンナや他のさまざまな友人たちと共に考えていた、と語っている。そのことは、難解な教義論争を扱う文中に漂う一種の緊張感と、抽象的な内容でありながらもそれが不思議な具体性の感覚を備えているように思われることから、感じ取ることのできるものではないだろうか。